

幼児の協同活動における感情の意味 —アクションリサーチによる会話分析から—

○芝崎美和 (新見公立大学)
湯澤美紀 (ノートルダム清心女子大学)

芝崎良典 (四国大学)

キーワード：協同活動，感情，会話

問題と目的

本研究では、ケーキ作りを促す環境を構成するといったアクションリサーチを行いながら、そこでの子どもたちの活動と会話をもとに、協同活動における感情の果たす役割を明らかにすることを目的とする。

方 法

研究対象 本研究の研究対象は、5歳児クラスを対象に学生と保育者が共同で実施した「ケーキ作りプロジェクト」という保育活動である。本研究では、6名で構成される1G(対象児①～⑥)に焦点を当て、①ケーキ作りについての絵本の読み聞かせ、②話し合い、③製作活動という一連の活動のうち、③製作活動についてのみ分析を行う。

記録方法 子どもと保育者の発話内容をフィールドノートに記録した。対象児名を記載しないなど、個人情報の取り扱いには格別に配慮した。

結果と考察

協同活動をイメージの共有という観点からⅦ期に分けた。会話の内容を、①全体、②部分、③統合に分け、イメージの共有過程と感情語の生起を示したものが Table 1 である。

Ⅰ期：不明瞭なイメージの共有と暗黙の役割分担

子ども達の間で製作物について明確なイメージが共有されておらず、暗黙の役割分担の中で各々が自由にケーキ製作にとりかかった。子ども達は、ネガティブな感情を言語化し、オウム返しするといったやり取りを繰り返すことで、活動への意欲を維持しようとしていた。

Ⅱ期：不明瞭なイメージの操作

各自が未だ不明瞭でぼんやりとしたイメージに基づき、製作活動を進めている。土台と部分の製作はイメージが交差することなく進んでいく。仲間のネガティブな感情を受容したり、それをポジティブ感情に変換するなどのやりとりは見られない。

Ⅲ期：具体的な製作物を目前にしたイメージの操作

土台が完成することで、イメージの共有が急速に進む。それに伴い、感情が言語化され、やり

とりされ始めた。ネガティブな言葉(例：「疲れるねえ。」)によって喚起されたポジティブな感情(例：「疲れないよ。楽しいもん。」)は、活動への動機づけを高めることに寄与したことがうかがえた。

Ⅳ期：空間の共有とイメージの再共有 感情語のやりとりが増えたことで、離れていた子ども達の距離がぐっと縮まり、みんなで一緒に試行錯誤を繰り返す姿が見られる。イメージと製作物との乖離が見いだされ、(例：「火って、こうすればよかったのに。」)、目的達成に向け、下位目的がいくつかに分化していった。他児を手伝うなど、非言語的ではあるが、他者の感情を推測し自らの行動を調整するといったやりとりも見られた。

Ⅴ期：役割意識の分散 完成を間近に控えたⅤ期では、イメージの共有が図られると同時に、活動への関与という点において、子ども達が二分された。活動を続ける子どもは自分の活動に没頭しており、離脱する仲間に対する共感、労り、励ましの言葉などは見られない。

Ⅵ期：役割の再認識 最終目標に向けた役割についての相互認識と相互受容(例：「①のいちご、⑤がつくってくれよ。」)が見られた。ポジティブな感情に裏打ちされるこれらの言葉を動機づけの源とし、子どもたちは活動への意欲を再度高めているようであった。互いを認め合うポジティブな感情風土が醸成され、より良い完成品を目指し、新たな役割の下、作業が進められた。

Ⅶ期：役割の再分担と目的達成に向けた下位目的の統合 ポジティブな感情風土において、共有されたイメージに基づき、目的の達成とテーマの共有が図られていった。また、製作物を褒める他グループの幼児の言葉(例：「何、このケーキ！おいしそ！」)は、彼らの活動意欲をさらに掻き立て、自尊心を高めたようであった。

以上のことから、協同活動においてイメージの共有と精緻化を図る過程において、感情のやりとりには、意欲の維持、共感的相互受容、ポジティブな風土の醸成などの役割があることが示された。

Table 1 協同活動におけるイメージの共有プロセス

対象児 No.	Ⅰ期			Ⅱ期			Ⅲ期			Ⅳ期			Ⅴ期			Ⅵ期			Ⅶ期		
	部分	全体	統合	部分	全体	統合	部分	全体	統合	部分	全体	統合	部分	全体	統合	部分	全体	統合	部分	全体	統合
①	3	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	1	0	3(1)	
②	3	1	0	0	0	2	1	1	2(1)	0	0	0	—	—	—	0	0	1	0	0	3
③	6	2	0	0	0	0	5	0	1(1)	1	0	4	—	—	—	1	0	4	2	0	2(1)
④	1	0	0	0	0	0	3	0	0	1	0	0	0	0	5	0	0	0	1	0	1
⑤	1	15(1)	2	0	7(1)	2	0	2	5(4)	0	0	0	0	0	2	0	0	5	0	0	10(1)
⑥	1	10(2)	0	0	2	1	0	7	0	0	0	3	0	0	1	0	0	1	—	—	—
保育者	0	12	0	—	—	—	0	2	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

※ “—”は、発話が見られなかったのではなく、その場にいなかったことを表すものである。

※ ()内は、感情語の数